

# ストック再生に向かう 建築・住宅と新たな視点



濱 恵介

Keisuke Hama

大阪ガス エネルギー・文化研究所  
研究主幹



宮本 佳明

Katsuhiko Miyamoto

建築家、大阪芸術大学助教授

第二次世界大戦で敗戦国となった日本だが、戦後、急速に経済成長を遂げ、世界有数の経済大国にまで復興した。急激に経済が発達している時は、古いものを壊し、新しいものを作り出す、いわゆる『スクラップ&ビルド』が経済効果を高めるためには確かに有効であった。しかし、経済成長が滞り、さらには地球環境問題が世界的な課題になるうとしている現代においては、もはやかつてのような単純な理屈は通用しなくなってきた。さらに、行き過ぎた経済重視の風潮に反発し、『心の豊かさを求める』『人も増えたことで、『本当は残すべきだったもので、破壊してきたのではないか』、『心の潤いをもたらすような開発が必要ではないか』といった意見も聞かれるようになってきた。そうした流れの一つが、単純に古いものを壊すのではなく、既存のストックを有効活用するリノベーションやコンバージョンの広がりと言えよう。

今回は、かつて住宅都市公団という立場から街づくりにかかわってきた当エネルギー・文化研究所の濱恵介が、住宅から街づくりまで手がける建築家の宮本佳明氏を宝塚の事務所を訪ねた。

## 震災を機会に地形の大切さを知る

濱 宮本さんは一人の建築家として建築から街づくりに至る仕事をされ、私は都市計画から始め大きな公的組織で建築・住宅に関わってきました。世代も違い、別々のアプローチをしながらも、既存のストックを有効活用すべ

き』という同じ考え方に至ったという点から、今日はリノベーションやコンバージョンなど、建築再生の意味についてお話できればと思います。せっかく宝塚の事務所に伺っていますので、まずこの建物についてお尋ねします。

ご出身は宝塚そうですね。

宮本 はい、私は宝塚で生まれ育ちました。事務所として使っているこの建物が、実は生家だったのですが、『阪神・淡路大震災』で被災し、行政の判断では『全壊』と判定されました。

濱 外から見たところ、全壊したというほどの被害を受けたようには見えませんが。

宮本 この建物は戦前からある四軒長屋の西から二軒目でした。恐らく一〇〇年近くは経っているのではないかと思います。それでも自宅部分は、よく調べてみると大したダメージを受けている訳ではないことが分かりました。しかし、西側隣家の小屋組が崩壊してしまったので、建物全体として全壊と判定されたわけです。

濱 長屋ですからマンションと同じで、別々の家であっても一つの建物として考えられたわけですね。

宮本 そうです。それで、それなら私も建築家ですから、自分の家ぐらいいは自分で直してやるう』と思って、巨大な鉄骨の構造体を入れて補強をし、このような家になつたわけです。ただ、住むのはちょっと無理があつたので、事務所として使うことにして、『ゼンカイ』ハウス』と名付けました。



『ゼンカイ』ハウス」外観

濱 こちら側はたいして壊れていないのに全壊と判定されたので、カギカッコがついたわけですか。

宮本 そうです。その後、賞をいただいたり、メディアに取り上げられたりして、いつの間にか私の代表作という事になってしまいました(笑)。普通の建物も設計するのですが。

濱 この家を手がけられたことで、建物に対する考え方も変わりましたが、宮本 地震の圧倒的な力を体験したことで、建築というよりも建物が建つ地形に対して意識的になりました。地震によって風景が失われても、地形だけは変わらずにそこにあることに改めて気づかされたからです。

濱 私がかつて手がけた団地設計でも、立地や地形は配置計画の大切な手がかりでした。地盤条件、高低差、既存植生など、その地形が持っているものを

どのように活かして設計するかということが面白かった。逆に平坦で四角い敷地はつまらない。ですから、地形を大切にするという宮本さんの考え方はよく分かります。

宮本 この家の場合最初は、自分の生まれた家ですから、思い出が詰まっているという個人的な理由から残すことを考えました。当時、公費解体制度というものがあって、多くの人がその制度を使って震災の後、家を解体しました。地震で家が壊れましたけど、さらにお金をかけて、まだ使える家を壊していく。結果として、地震よりも人為的に壊した家の方が多いのではないかと思います。公費解体制度とは、解体には公費を出すが、修繕には出さないという制度です。公費修繕制度はなかった。

濱 まだ使える建物を含め、解体を促進するような制度だったのですね。

宮本 結果として、そういう働きでした。住めるような家であっても、勢いで壊してしまった人が結構多かったのではないかと思います。当時、建築家のボランティアグループで、工務店と一緒に、五〇万円程度で被災住宅を仮設住宅レベルまで修繕するシステムをつくったのですが、あまり活用されませんでした。一方で仮設住宅の建設には三百数十万円かかった訳です。

濱 行政には修繕や転用を支援する制度は何もなかったということですか。

宮本 ありませんでした。そういう経験もあって、自分の家ぐらいい壊さずに残してみようと思ったわけです。意地でやった面も確かにありました。

### 時代が求める『ストック再生』

濱 ここ数年で、『ストック再生』、『コンバージョン』といった言葉が急速に注目を浴びてきています。

宮本 確かにそう思います。建築専門でない、一般のメディアでも、最近よく『コンバージョン』という言葉を目にします。

濱 ただ、それらの『コンバージョン』は、実は、『リノベーション』と言ってもお

かしくないものも入るかもしれませんね。また英語で「reform」と言うのと、日本語の「リフォーム」では意味が違うように、同じ用語を使っていながら、思っていることと受け取られる意味にずれがあるように思います。

宮本 リフォームにしろ、リニューアルにしろ、全部頭に「R」がつく言葉が流行りという感じもありますね。

濱 今回、『ストック再生』というテーマを選んだのは、これからはいろんな意味でストックを再利用、再活用することが必要になると考えたからです。実際に都心部では、すでにストックが余っているという現実があります。人口増加が止まり、大都市への人口集中がもはやないにもかかわらず、マンションはどんどん建てられている。その結果、どこかの建物を空洞化しながら、新築の建物に客を集めている。

これは、私がかつて携わった住宅大量建設時代のよ様な経済力学がまだ生きているからだと思います。ただし、いくら再利用が重要だからといって、新築は必要ないと言っているわけではなく、将来、修復するに値するような新築を造らなくてはいけないということなんです。今は膨大なストック



あらかじめスケルトンとインフィルを分け、リノベーションにも対応できるように考えて宮本氏が設計した住宅。100年は使えるインフラとしての人工地盤が印象的

を抱えてしまっているのですから、新築を考える前にそれを利用しない手はない。『ストック再生』が注目を集めているのは、そのような概念だけでなく、それが経済ベースに乗ってきたからではないかと思っています。

宮本 同感です。こういう状況になるまで三つぐらいの背景があったと思います。現にストックが余っていることが一つ。二つめがエコロジープームで壊すのは勿体ないじゃないかという気持ちから。そして三つめが、新たな価値の発見です。つまり、新築より改修した方がよりいいものができるということが証明されて、だんだん浸透してきたのではないのでしょうか。

濱 確かに環境問題を初めて自覚したのが、公団住宅の建て替えの時でした。もう一七、八年前になります。身近な先輩たちが造った建物は、少なくとも私が生きている間くらいは、ずっとそこに建っているもの、と思っていたのですが、こんなに早く壊され、大変な量のゴミになるのを見て愕然としました。

宮本 私が環境問題を意識したとき、かけは若い頃に住宅の建築現場を見たことです。新築するのにすごい量のゴミが出るのですが、職人さんは平気でドラム缶にそれらを放り込んで燃やしていました。家一軒造るのに、こんなに「ゴミが出るか」という感じで、それが何年か後に解体されたら、また大量のゴミが出るわけです。これは大変なことだ、と思いました。

### 『家をとく＝解く』ということ

濱 私がインドネシアのジャカルタに住んでいた時、古材市場というのがあって、解体した家から出た使用済みの建材を大量に売っていました。この国には古い材料をもう一度使うという環境が整っているんですね。教えられました。それから一九九〇年に日本に帰ってきたのですが、当時はパブル絶頂期だったので、まだ新しいキレイなビルがドンドン壊され、新しいビルが

建てられていたのを見て、『なんて罰当たりな』と思いました。

宮本 インドネシアの古材市場の話は非常に興味深いですね。よく言われることですが、「ゴミ」の定義とは人が物を「ゴミ」と判断するかどうかにかかっているのであって、そういう意味では、インドネシアの人たちは古材に新たな資材性を発見しているわけですね。

濱 そうです。日本にもかつては同じ様な価値観がありました。私の親の年代は家を壊すのではなく、「家をとく」「解く」と言っていました。解くというのは、着物の糸を抜いて、また反物に戻す感覚と同じです。ていねいに解体し部材を一つ一つ整理して、まだ使えるものはストックし再利用する、部材として補修用にも使えないものは竈で燃料にする。そのようなシステムが昔はあったわけですね。

宮本 確かに、日本の在来木造の住宅は「解き」やすいですね。

濱 それが財産でしたから。例えば藤原京から平城京、平安京などへ昔の都が移ると、宮殿や寺院の建物を解体し建材を遠くまで運んでいたそうです。木の切り出しや部材の加工が大変だったからでしょうが、でもそれは、今も生かすべきシステムであったり、価値観であったりするものだと思います。

宮本 大阪市大の中谷礼仁さんは、「弱い技術」という言葉を使われています。在来工法は弱い技術でできているだけに部材の転用が容易です。古民家を解体してみると、そういう転用を平気でやっていることが分かります。では「強い技術」というのは何かというと、たとえばジャンボジェット機をつくるような技術です。ジャンボジェット機は退役したからといって他に転用のしようがない。解いていくことも容易ではありません。

濱 再生可能な材料と非再生材料に違いがあるかもしれません。金属も再生が可能ですが、再生するには大量のエネルギーがいります。それに対して、木材が最高の材料だと思うのは、植林して五〇年育てれば立派な木に成長する、つまり自然の力で再生されるからです。加工にも人の力で大抵のことはできる。ところが今の都市では、これだけの高層化が進むと、木の出番が少なくなってしまう。内装、調度くらいしか使えない。そういった意味からも、リノベーションというのは個人でも加工できる「弱い技術」に向いているのかもしれないね。

### 「環境ノイズ」を読みとった都市計画を

濱 ところで大阪では、中崎町や空堀といった地域で、オフィスビルを集合住宅にコンバージョンするとうような大々的な動きのものではなく、長屋レベルの建物を、ちよとした店にしたり、新たな感覚の住宅にしたりということが一つのブームになっています。

宮本 古い建物をじっくり見ると、昔の人の意図がよく読み取れます。同じように風景からも昔の人の意図を読み取ることができます。都市計画は人が理想的に計画するものですが、実際には地形の影響を受けたり、さらには昔の都市計画の影響を受けたりして軌轍が生じる。それをむしろポジティブな意味を込めて「環境ノイズ」と私は呼んでいます。都市はいわば記憶の器です。過去の記憶の上に新しい記憶が積み重なって、現在の形があるわけで、その意味でストック再生は、記憶を有効に活かす手段でもある訳です。

濱 建築の設計には制約条件

が多い方が、創造意欲をかき立てられるのではないかと思いますか？

宮本 それはまさにその通りです。先ほど濱さんが団地を造る時に、「既存の地形を活かす」と言われましたが、それと同じことがリノベーションでも起こるわけです。リノベーションは躯体が既存の地形のようなもので、その上にどういったデザインを展開するかということに面白みがある。私は、リノベ



ジョンというのは環境ノイズの建築版だと思っています。既存のものに何かを付け加えると違和感が生まれ、ノイズが発生する。それが逆に空間の豊かさを生むのではないかと思います。

濱 私は「ノイズ」という表現にまだ馴染んでいませんが、要するに土地の記憶との関係ですね。一例を挙げると、なぜJR神戸駅は東西に走る線路にあるのに南北に配置されているか。その理由は、もともと港の方に向かって線路であり、神戸港に達する終点だったことに間違いありません。当時、路線を姫路の方まで延ばすことを考えていなかった。その辺りがまさに土地の記憶、経歴ですね。

宮本 そう、それが風景に違和感と同時に豊かさをもたらしている。同じように、東京の井の頭線は明大前駅のところまで不自然にクランクしています。実現されなかった外環状線計画の名残らしいですが、いわば「土地のゴースト」ですね。そういうものを発見すると、昔の人の意図がそのままダイレクトに伝わってきて、なんだか豊かな気持ちになります。他にも、大阪の「千里ニュータウン」はドーナツ型をしていて、真中に上新田地区とって買収し損ねた「村」が残っています。畑の向こうに高層マンションが建っていて、非常に唐突なのですが、これが何かいいなと思わせるところがあります。

濱 計画的な新市街地に囲まれ、昔ながらの集落や里山の雰囲気があって、違和感ではなくほっとする共存ですね。

宮本 これからの都市計画には、そういったことを意図的に取り入れていく必要もあると思います。

制約がある中で「自由」が必要

濱 私が公団にいた頃、著名な建築家に参加してもらった住宅団地づくりがありました。横浜の金沢シーサイドタウンや東京の多摩ニュータウンなどで

すが、その時、いろいろな議論がありました。当たり前前の居住性を守るためにはどこまでデザインの自由度が許されるか、居住性を犠牲にしてデザインを優先するのは間違いだろうか。建築家であれば、自分の作品にこだわりがあるのは当然です。議論のポイントは、私有物としての住宅なら許されるものであっても、社会の共有財産としては、どこまで自由な設計が許されるかということです。



『『ゼンカイ』ハウス』を内部で支える巨大な鉄骨

宮本 確かに集合住宅は難しいですね。すべてを自由に設計することは許されません。

濱 私はいろいろな意味で「自由」という価値をもう一度見直すべきではないかと思っています。自由ということとは、単に「何をしてもいいよ」ということではないと思うからです。いい暮らしをしたい、おいしいものを食べて便利で安楽にということを、自由に追求してきたからこそ、これだけ環境問題が深刻になったのではないでしょう。建築家のデザインの自由も、むしろもっと強い制限がある中で自由がいいのではないかと思いついています。ただ、制限をどう設定するかには合意がいりますが。

宮本 『制限の中の自由』ということですね。

濱 建築単体は建築基準法で規定されているけど、町並みを見てみると、この立地にどういった形でどういった高さのものが町全体の空間に調和するかという制限は、無いに等しいわけです。そのへんが町を混乱させているのではないかと思います。ですから、地区計画をキチンと決めて、「大体この軒の高さでこれくらいの色をの町をつくるようにしてください」といった制限

**宮本 佳明** (みやもと・かつひろ)

建築家、大阪芸術大学助教授

1961年宝塚市生まれ。87年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了。88年アトリエ第5建築界設立、95年がれきで震災の記憶を伝える芦屋川左岸体積体プランで「夢シテ21への提言 阪神大震災をこえて」最優秀賞。96年ベネチア・ビエンナーレ建築展の震災展示で金獅子賞。97年『『ゼンカイ』ハウス』で、(社)日本商環境設計家協会デザイン賞 98 ジャン・ヌーベル賞、(社)日本建築家協会新人賞、日本インテリアデザイナー協会賞インテリアスペース部門賞受賞。

**濱 恵介** (はま・けいすけ)

大阪ガス エネルギー・文化研究所 研究主幹

1968年東京大学工学部都市工学科卒業後、日本住宅公団～住宅・都市整備公団で都市住宅建設・住環境整備に携わる。その間、フランス政府給費留学、東京大学工学部非常勤講師、インドネシア技術協力などを経験。1998年から現職。2004年から大阪大学大学院工学研究科招聘教授。研究領域は、環境と共生する住まい・街づくり。著書に『わが家をエコ住宅に - 環境に配慮した住宅改修と暮らし - 』（学芸出版社）。「再生エコハウス」で日本建築家協会の環境建築賞に入賞。



の中で、アーキテクトは自分の作家性を発揮するようにする。

宮本 制限が色々ある方が、設計する側としてはむしろ燃えるものがあります(笑)。

濱 そういった意味で、リノベーションは既存の物件という制約がある。つまり自由ではないわけです。制約の中のデザインですから、これがなかなか面白い。

宮本 この『ゼンカイ』ハウスもそうやって造りました。

濱 私も関西に住むことになった時、中古の住宅を購入して、環境共生住宅に改造しました。建築デザインだけでなく、エネルギー消費量の制約も結構面白いですよ。「電気は太陽光発電量の範囲で収める」とか、「二酸化炭素の排出量を平均の四分の一にしてみせる」とか。その経験からも、共通の利益のために個々の自由をある程度制限してみると面白い生活ができるのではないかと思います。キーワードとして、制約の中の自由」というのがり

ノベーションにも環境問題にも通じるものがある。ですから、今のあまりにも混乱している都市景観に対して、個性的で面白い街づくりができるのではないかと思います。その場合、エコロジーという視点も忘れてはなりません。

宮本 正直に言って、まだ自分の仕事のなかで、エコロジーとどう取り組むか整理がついていません。つまり、「エコロジーにつくる」ということだけが優先の課題にはなりにくいわけです。それがデザインや機能性とうまくリンクして、解決できる方法を見つければいいですね。

濱 エネルギーをたっぷり使って快適さを得るのは、これからはもつただめだ、という人も確かに増えていきますから、宮本さん世代の建築家の方たちが、これからはそういうことを意識して進めていただけると、きつと方向が変わっていくと思います。今日は、有益な議論を交わすことができ、ありがとうございました。

CEL